The Zoological Society of Japan

●フランシス・メートランド・バルフォア傳（口繪參照）

理學博士　谷津直秀

フランシス・メートランド・バルフォア（Francis Maitland Balfour（Nov. 10 1851—July 19 (?) 1882）は英國ホッチンガムに住せし、シエームス・メートランド・バルフォアとブロンシュ夫人との第六子・第三男としてフランシスは一八五一年十一月十日にエヂンバラに生れたり。父は一八五四年マデイラに航し、肺患を療養したりしも一八五六年に三十六歳にて他界の人となりたり。故に教育は全く母の手にてなされたり。母は子供の遺傳的の體質を改良せんとて博物學を奬勵したり。子供は蝶や鳥に對する興味の外、化石を非常に好む樣になりしは全く家の前の砂利の中に介類の化石の存せしに起因せり。フランシス七・八歳の頃誕生の祝として最も喜びたるは化石入れの箱なりし由。

フランシスは左利なることと他の原因よりして字を書くことに困難を感じ、小學より中學までは學業他の生徒に劣り平凡なりしなり。

一八六五年（十四歳）にして『ハロー』準備學校に入り、初めて課外に博物學の講義實習等をなし、休業中にはダンバーの海岸をドレッヂにて採集を試み動物學上の智識を得たること少からず。

一八六八年（十七歳）にて石炭に就ての論文を書き賞として顯微鏡を得たり。

一八七〇年（十九歳）にて『ケンブリッヂ』大學の入學試驗に及第して特待生となり、マイケル・フォスターは鷄の發生を研究す、切片を切ること、圖をかくこと大に無器用なりしも漸々進歩したり。

一八七二年（二十一歳）にて母を失ひ精神的に大なる打擊を受け益奮勵したり。

一八七三年（二十二歳）にフィンランドに旅行して夏秋を暮し、十二月に卒業試驗を受けニュエル・マーチン（『ジョンス・ホプキンス』の生理學の教授となりし人）が一番でバルフォアは二番で卒業したり。文章の充分に書くこと出來ざる爲に試驗には常に成績良からざりし由。直にナポリに行く。

一八七四年（二十三歳）の六月までナポリにて鮫類の發生を研究し發見せる新事實多し。八月にはベルファストの英國科學會に出席して其の結果を發表し、多くの人を驚かせり。十月に『トリコチー』大學の特待研究生となる。直に南米に赴き保養す。

一八七五年（二十四歳）の二月南米の南端を廻航して英國に達し、三月再びナポリに行き五月まで滯在、八月再びフィンランドに旅行し、十月は初めて講義をなす。講義は雄辯ならずと雖ども思慮に富める人の爲し得るものな

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

りし。

一八七六年（二十五歳）の四月三度ナポリに遊び、鮫類を研究し夏歸途アルプスを通り攀山の意勃々として起る。十月より動物形態學の講義をなす。冬の休みにはギリシャに遊べり。

一八七七年（二十六歳）十月に新教室に移る。冬休みをシーリー島のラグーザに暮す。

一八七八年（二十七歳）の一月シーリー島より歸り、鮫類の大著を終り、皇立學會の特待研究生に擇ばれ講義及自身の研究の傍『比較發生學』の大著にとりかゝる。二年にして第一卷出ず、即ち一八八〇年（二十九歳）のときなり。其後スキッツルに行き初めてアルプスに登る。

一八八一年（三十歳）第二卷成る。『グラスゴー』大學よりLLDの名譽學位を得、皇立學會よりは賞牌を授けらる。夏再びアルプスに登る。冬休みにはメッシナのクライネンベルクを訪ふ。蓋し前年に於て『比較發生學』の著に熱注せし爲めに疲勞を醫せんとしたるなり。然るにカプリ島に弟子のコードウェルの腸チブスの爲に病床に呻吟するを聞くや彼の母來るまで自身の危險を省みず看護したり。

一八八二年（三十一歳）の初め此看護よりして病原を得て自ら腸チブスとなり、重症なりしも、順當の經過を經て春はロンドン及び海峽諸島に遊び、五月には動物形態等の講義をなせり。時に『オックスフォード』及び『エヂンバラ』大學より招聘せんとの運動盛なりしも固辭して母校に留る。母校は止むを得ず彼の爲め一八八三年より動物形態學の講座を設くることに可決せり。六月初めアルプスに行き、前二回雇ひたるヨハン・ペートルスなる强力を供にシャモニーに歩み、ペンツレーの白針（エーギュイユ・ブロンシュ）を讀んで其險を探らんとす、此一角は蓋し未だ誰も成功したるものに非ず。七月十八日午後リールマイヤーより三日間の食糧を脊にし强力と共に出で翌十九日に或る歸を下るとき强力の足滑りたる爲め其ともろ共バルフォアも引き落され、岩角に頭骨を三ヶ所穿たれ頸椎も亦破られてあはれフレスチー氷河の上に冷き軀として見出れたり。八月五日ホッチンガムにて葬式あり、同時に大學にても式ありたり

彼初めてナポリに行くやドーン彼を讃じて "a real scientific head" （眞の科學的の腦髓）と呼べり。蓋し彼は幼時より自然を研究するの念に厚く、地質に風俗に、外國語に、生物に皆興味を有したるなり。丈六尺、體質强壯ならず常に攝生に怠なかりし爲め初めて學業に堪へ得たりしなり。

我邦にては箕作教授は親しくバルフォアに學ばれ、英國にてはセッヂュウック・バーカーの如き米國にはホスボーン・スコットの如き弟子を有す。此隕星的の動物學者も亦自ら石を磨て玉となせるものにて、天才的のものに非ず。然し此傳を讀むもの彼の如何に玉となるに熱心なりしかを知ると同時にバルフォアたるを得ば若し其の壽に十數年を縮むと雖ども怨む所なきの感を抱かん。

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

FRANCIS MAITLAND BALFOUR
1851-1882

NII-Electronic Library Service